

新潟市東厩島町の町屋 調査・解体報告

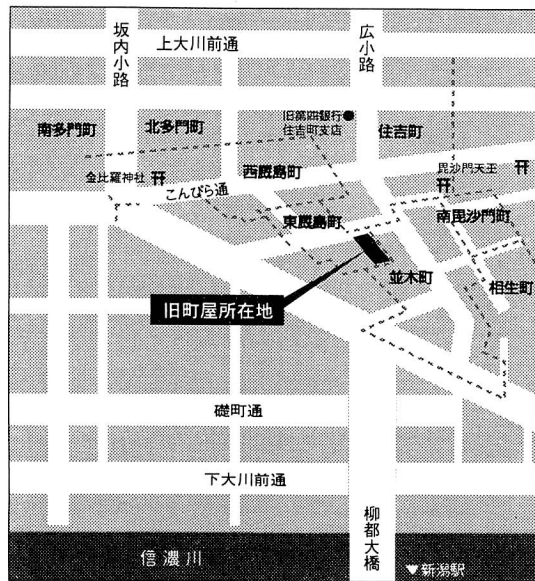


新潟の町屋を生かす会

2003

目 次

東厩島町の町屋をめぐって	大倉 宏	3
トピックス1 番付		12
東厩島町の町屋実測調査について		
岡崎篤行・黒野弘靖・水嶋貴之		13
トピックス2 面戸瓦		17
東厩島町の町屋の移築支援活動のこれまで		
大倉 宏		18



東殿島町周辺略図

***表紙写真**

通り土間には、以前は〇家の苗字の一字を染め抜いた暖簾があったが、昔の屋号を復活させ「丸にうの字」すなわち「マルウ」に変えたという。マルウとは、〇家の先祖の名前であるウヘイに由来する。

(撮影 村井勇)

東厩島町の町屋をめぐる

大倉 宏

町屋の空気

6年前（1997年）、はじめて新潟市東厩島町（ひがしまやじまちょう）のOさんのお宅（もう解体されてしまったので、ここでは東厩島町の町屋と書きます）に足を踏み入れた時の驚きは、鮮やかに覚えています。目の前に現れた通り土間が、一瞬、まるで時の壁にあけられたトンネルに思え、遠い時代の風が向こうからながれてきて頬にあたったようでした。

10代、20代を関東の新興住宅地で過ごし、新潟に来てからもアパートや新興住宅地での暮らしの長かったため、古い町屋の空間が新鮮に感じられたのでしょう。でも、それだけではなかったという気がします。

家は古いのですが、現在に生きているという感じがありました。一人住まいのOさんと、まもなく親しくさせていただくようになりましたが、ひとつには住人の若々しさが、家の空気となって流れているのを、最初に肌に感じたためだったかもしれません。その後、空き家となり、やがて解体されていった過程で、家は目の前でさまざまに変貌をとげました。部材などの随所に刻まれた時の重みや傷みも凶らずも目撃することになりましたが、この家は私の心のなかで、今も愉しげな風の通う、美しい場所として生きています。「時代」に触れることを、これほど実感させてくれた場所はほかにありません。

家の空気はもちろん、そこに住まう人に左右されます。しかし「町屋」という建物そのものにも、どこか人を生き生きさせる、やわらかい活力の種子があるような気がします。それは、私たちがなじんだ団地やマンション、新興住宅地の現代住宅がなくなってしまう何かではないかと感じることも、しばし

ばでした。

一例を挙げるなら、通り土間という空間のユニークさです。入口を入るとそのまま、自然に家の奥へ導かれ、中にいる人に声をかけることができる。私の声に御当主が姿を見せると、いつも土間に接した居間に、どうぞどうぞと誘っていただいたものでした。こういうスムーズさは、鉄のドアや玄関などの障壁を持つ新しい住宅やマンションでは不可能です。町屋では居間にあがるほどの時間がなければ、立ったまま、あるいは通り土間沿いの細長い上がり框に腰かけて、話をすることもできます。住み手のオープンで明るいお人柄は、こうした町屋の空間と、一つのもののように感じられました。

また中に入ってみて感じたのは、明るさです。家と家が軒を接して隣接する町屋のなかは、照度計で測ればかなり暗いのに、けっして陰鬱ではありません。土間に開けられた高窓や坪庭から差し込む明かりなどで、やわらかく照らされること、風通しがよく、仕切壁が少ないために開放感があること、家の奥深さや、ほのかな暗さが、対比的にそうした光をより繊細に感じさせることなどが理由でしょうか。町屋のそんな不思議な魅力に気づいたのも、この家で過ごさせていただいた時間のなかででした。

この家で新潟の町屋に最初に親しませていただき、古い庶民の町の空気を呼吸できたのは幸せなことでした。

下町と東厩島町

町屋のあった東厩島町は、新潟市の旧新潟町地区内の下町（しもまち・通称新潟島の信濃川下流部に面した市街地）の一面にあります。

下（しも）はもともと確定された地域というより、



図1 東厩島町の町屋（正面）

撮影 村井勇

新潟町の下流「方向」を指す言葉でしたが、漠然と下流側の「地区」を指す言葉としても使われてきたようです。

明治の中期に、それまで市内に分散していた「貸座敷」が、当時の下地域のはずれの本町14番町に集められたことから、一時この「新潟遊郭」の隠語として「下」の言葉が使われたこともあるようです（そのため、年輩の方のなかには、この語感を快く感じない向きもあります）。

現在、新潟で下町という場合も、使う人によって、指す範囲が一定しません。一番大きい捉え方では、榎谷小路（まさやこうじ）より下流側全域を指します（ここでは、このエリアを<下町>と表記します）。新潟町は1640～50年頃の町立て（古新潟からの移転）の際、湾曲する信濃川河口の左岸河畔のラインに平行して、現在名で言う西堀通、古町通、東堀通り、本町通りなどの通りが新設され、上流側から現在それぞれ1番町、2番町……と町名がつけられています（西堀通りは12番町、古町通は13番町、東堀通りは13番町、本町通りが14番町まであります）。<下町>は、それぞれの通りの7番町（現町名では「西堀通り」は6番町*）を含む下流側が、古い市街地です（なお、本町通りの川側を平行に走る上大川前通りは、町立ての際には名前通りの川岸であったところが、後に通りとなったものです）。

<下町>は、この古い（初期の）市街地に、徐々に新たな地域が付加され、拡張されていくなかで形

成されました。背景には信濃川という大河の河畔という立地状況があります。江戸時代初期には新潟町と対岸の沼垂町（ぬったりまち）の間に、多くの中州があり、洪水のたびに数や位置が変わりました。中州（島）のいくつかは、江戸時代中期以降、次第に新潟町に近づき、やがて島と町の間の河道を細い水路の形で残しながら町の一部となりました。町が河側にふくらんでいくこの現象は、主に<下町>で起こりました。この結果<下町>は計画的に作られた旧市街地に、後に自然現象で拡張し町化していった地域、さらにはそこに近代以降の都市計画や人口の増加で宅地化された地域（湊町通り、窪田町など）がたつなり、重なりあっていくことで、総体として、道の方向性に整序感のない「迷路のような」町という性格を帯びるようになります。

東厩島町は、江戸時代にあらたに「寄り付いた」島のひとつ「厩島」（実際に馬が飼われていたことから付けられた名前と言います）の東側にあったことに基づく町名です。現在の家は二十数軒。下町に多い小町内の一つです。「こんびら通り（旧厩島大通り）」商店街の大半を含む西厩島町が西隣にあり、こんびら通り東側の裏通り（旧厩島中通り）の中程一帯が町内です（通りの北端は住吉町と並木町、南端は秣川岸通り（まぐさがわぎしどおり）1丁目）。

近くの南毘沙門町、北毘沙門町は、現在の湊町通り一帯をふくむかつての「下島」の南側を指していた「毘沙門島」に由来する町名です。現在の広



図2 住吉町の町並み 手前2棟は取り壊されて現存しない

小路から住吉町、並木町へとつながる道の北側は、厩島と毘沙門島間の河道跡と思われ、江戸時代中期には「一文字川」と呼ばれる水路があり、信濃川に通じる川岸には対岸の沼垂への渡し場がありました(図2)。

下町一帯の上大川前や本町や東堀などの界隈や、こんびら通りや住吉町、並木町周辺は、全体的に古い家が多く(水嶋貴之さんの調査ではこの界隈では、約40パーセントが50年以上たつ家と見られるそうです)、道を歩いても、どこか歴史的な情緒が家々の軒下や小路の奥から匂ってくる感じがあります。特に旧小川家のあった道沿いには、他にも古い建物が幾棟もあり、5年前には歴史を感じさせる趣のある道でした。しかし、旧O家を含む一部が道路拡張の法線にかかり、線内の家々が壊されたのに加え、そうでない場所にあった家も相次いで取り壊されてしまい、歴史的な風格がくずれてしまったのは残念でなりません。

* 以前の堀を挟んだ西堀通りと西堀前通りは、西堀通り上手にある裁判所の敷地が「学校町通り」になっているため、向かい合わせの番地が一つずつずれています(西堀通りが西堀前通りより一つ少ない)。

A家とO家

Oさんのお話では、今回解体された東厩島町の町屋が、O家の所有となったのは、昭和12(1937)

年だったそうです。それ以前、この家はA家でした。今回の解体作業中に屋根裏からA・K氏あての葉書44通、電報3通(ほか長岡市寶田石油株式会社あての印刷葉書1通)が発見されました。消印や日付が明治40(1907)年と41年のものですが、宛先の住所を見ると40年10月までが豊照町(東厩島の近くの町名、但し2通は味方町山岸合名会社あて。A・K氏の勤め先と考えられます。)に、同年11月1日付けの葉書から東厩島町になっていて、A・K氏が明治40年10月頃、豊照町から東厩島に住まいを移したことが分かりました。この転居時が町屋の新築時と考えるなら、建物の竣工は明治40年秋ということになりますが、購入したケースも考えられ、確定はできません。

葉書には日本練炭、金津石油、寶田石油、大和石油などの株主総会の知らせや株の交付書、借金の返還延期を乞う私信などもあり、A・K氏が燃料関係の企業の株を買ったり、金を貸し付けるなどする資産家だったらしいことがうかがえます。

一方O家は明治時代には長らく湊町通りに家がありましたが、昭和6年11月に西湊町通りに移り、昭和9年10月に豊照町に転居、昭和12年に東厩島の家をA家から買って移ります。当主も長男も勤め人で、今でいうサラリーマン家庭でした。

新濁の町屋の多くは店舗(あるいは仕事場)兼住宅で、通りに面する部分が店舗になっています。東厩島町の町屋はこの店舗部分のない専用住宅の町屋



図3 平入りの町屋 奥が妻入りになっている

でした（おそらく建築当初からそうであったのでしょう）。店舗にあたる部分は板塀で囲われ、庭が作られていました（今も同じ様な形の住宅が、近くの北他門町などに見られます）。新潟の町屋は江戸時代から明治にかけては妻入り型が主流でしたが、明治後半から行政指導もあり、平入りに改変する家が増えました。しかし、上越市高田地区や村上市旧町人町のような、通りから敷地後方まで平入りで大屋根をかける家はなく、通り側の店舗部分を平入り総2階建てにし、奥に続く住居部分は旧来の妻入りの平屋として作るタイプが普及しました（図3）。旧小川家は新潟の町屋が変貌していった以後も根強く継承された妻入り平屋型の町屋住居部分の典型的な形を伝える住宅であり、その妻入りの外観は新潟町屋の古型を伝えるものと考えられます。

『新潟市史 通史編2 近世(下)』(1997)92ページに、幕末期の新潟の町屋「田辺忠蔵の家」の間取りが掲載されています。この図と東厩島町の町屋の間取り（原型）を比較すると、通り土間に沿って、2列に居室が並び、住まい部分の表側の奥（通り土間に接しない側）に床の間、仏壇を並べる座敷のあること、その裏に坪庭を作り、土間奥に土間部分と板間からなる炊事スペースがある点など、よく似ています。内部構成の点でも、東厩島町の町屋は新潟の町屋の古い（近世に遡る）形を伝えていると言えます。

土壁から出てきた紙片

〇さんから、以前家を改築したときに万延元（1860）年という年号の入った墨書が出てきたと、大工さんが言っていたとのお話をお聞きました。

改めて確認していただいたところ、入口脇の壁の中から墨書のある板が見つかったとのことでした。しかし板はすでに破棄されてしまったとのこと。墨書が事実としても、板が再利用されたものである可能性があります。

何度か屋根裏にも上がって棟札がないかと探しましたが、見つかりませんでした。解体作業が始まり、柱や梁のほぞなど、表に見えない部分から手が出てこないかと期待しましたが、番付などは書かれていたものの、建設年代推測の手がかりになりそうなものは出てきませんでした。

軸組が撤去され、土台まわりの片づけが始まったところ、解体を担当した壱 Work's の平野さんと大工さんたちから、興味深いものが出てきたと連絡がありました。くずした土壁の中から出てきた紙に字が書かれているというのです。土壁を崩しはじめた時点で注意していれば良かったのですが、木部ばかりに気を取られていたため、気づかなかったのでした。あわてて、堆積した残土の中から、やぶれた紙片類や紙の挟まった壁のかけらをできるだけ拾い集めてもらいました。どの壁の破片であるかも、大工さんのお話でチェックしましたが、建物がほぼ解体されてしまった状態では直接確認はできませんでした。

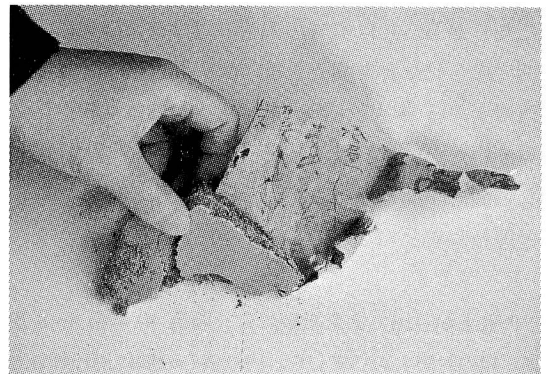
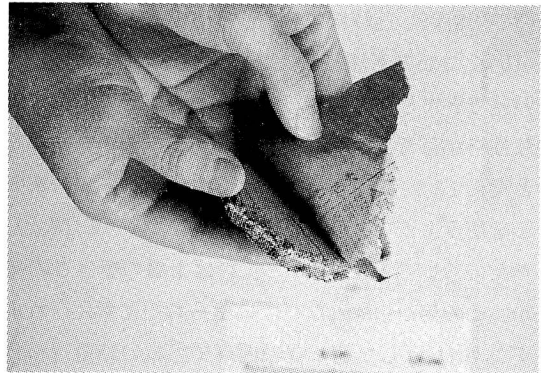
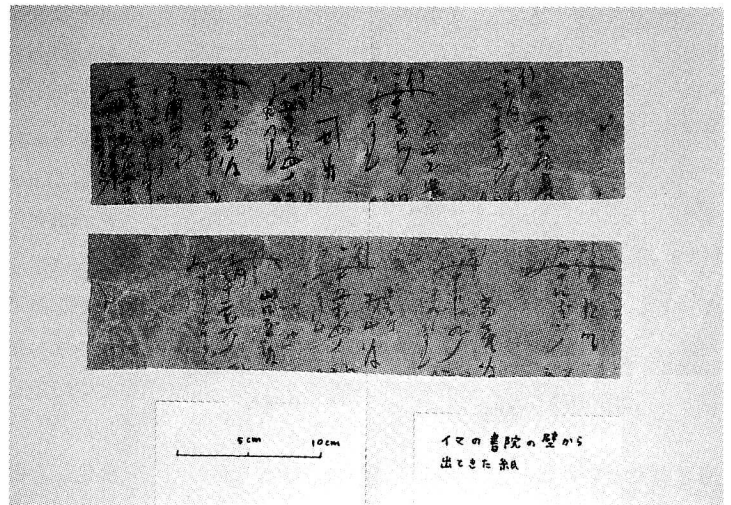


図4 塗り込められていた紙片 上段はイマの書院に塗り込められていた紙。中段は塗り直した壁に塗り込められていた大正2年の新聞。下段は下層の壁に塗り込められていた反古紙

集めた破片を見ると、厚手の紙に墨でくずし字の書かれたもの、薄手の野線のある（事務用箋らしい）紙に楷書で書かれたもの、新聞紙の大きく分けて3種類の紙が挟まれていることが分かりました。年輩の佐官職人の方に聞いたところ、貫のずれにともなう壁のひび割れ防止のため、こういう紙の塗り込めをすること（古い家では藁を用いたりもするそうです）（図4）。

このうち厚手の紙と新聞紙は、土壁に一部塗り込まれた状態の破片が残っていました。断面を見ると壁は粗壁土の上に一旦白い漆喰が塗られ、その上にまた土を塗り、再度漆喰が塗られていました。そして厚手の紙は一番下の層の土壁に、新聞紙は一番上の漆喰層の下に挟まれていました。

壁の仕上げとして塗られる漆喰層が2つあることは、一旦壁が仕上げられたあとで、その後壁が塗り



図5 焼け跡の残る大引

直されたということです。なぜこのような塗り直しがなされたのかは、定かではありませんが、痛んだ壁の化粧直しと解釈するのが自然でしょう。

いくつかの新聞紙に大正2（1913）年の年記が発見できました。新聞紙は、おそらくその消費紙的な性格から考え、比較的新しい不要のものを使ったと考えていいでしょう（例えば10年以上前の新聞紙を使うようなことは、ないことではありませんが、考えにくいことです）。とすれば上層の壁はこの年か、この年からほどない頃に塗られたと考えられます*。塗り直しが前の壁の傷みや汚れの結果行われたとすれば、上層下層の壁にはそれなりの時間のへだたりがあったはずで、下層の壁はほぼ確実に明治期に塗られたと推測できます。下層に塗り込められた厚手の紙の字は、新潟県立文書館の本井晴信氏に見ていただいたところ、貸付金などを記す大福帳的な帳面の一部と思われ、書体は明治中期以後のものと思われるとのことでした。

* 壁土から出てきた紙類には、明治40年のA・K氏宛の封筒もありました。塗り直しの壁に使われたと思われませんが、このことから2度目の壁塗りもA・K氏の時代に、A・K氏が関与して行われたことが分かります。前記の葉書と重なる時期のものであることから、この壁塗りの時、A・K氏から提供された反古紙としての手紙類のうち、壁の補強には役立たない葉書だけが除外され、屋根裏によけて置かれたまま放置された可能性が考えられます。

焦げたりサイクル材と建設年代

解体中のもう一つの発見は、床下から出てきました。事前の調査の際にも一部確認されていたのですが、床下部材である大引きのほとんどに黒い焼け焦げの跡があり、ほぞやほぞ穴もことから、柱などの再利用材であることが分かりました（図5）。ほぞ穴は小屋束の一部にも認められ、表に出ない部分にかなりのリサイクル材が使用されていることが分かりました（焼けた部材は屋根裏からも1本、母屋と梁に差し掛ける形で置かれているのが発見されました。）

炭化した部分は、焼け方から見て意識的に焦がしたもとは思われないので、火事で焼け残った部材と考えるべきでしょう。他の家の焼けた木をリサイクルすることは考えにくいので、町屋が一旦火災で焼失し、その再建時に利用できる木材が再利用されたということではないかと推測されます。焼失前の町屋が同じ場所にあったかは確定できませんが、リサイクルの理由が経費削減であったとすれば、遠く離れた場所の焼け残りを運搬してきたと考えるよりは、同じ場所か、さほど遠くない場所に、焼失前の町屋があったと考えられます。

東厩島町周辺の火事で注目されるのが明治23（1890）年の大火です。新潟新聞の記録によれば、同年4月3日午後11時45分頃住吉町花沢次郎方から出火した火事は住吉町、並木町、南・北毘沙門町、相生町、見方町、東湊町通り一ノ町、東・西厩島町、秣川岸町二丁目等の戸数293戸を全焼した大火災でした。このとき東厩島町の55戸も全焼しています*。狭い町内でこの戸数から、東厩島の建物すべてが全焼したと考えてよく、町屋の建設年代は少なくともこの年を遡ることはないことになります。下町の大火で、この地区に被害が及んだ可能性のあるものはほかに明治35年5月と41年3月のものがありますが、前者は火元が古町通り8番町で、東堀で焼け止まっており、また41年には上記のA・K氏あて葉書が3、4、5月と東厩島町の宛先に届いていることから、この町屋には関係しなかったことが分かります。

以上の手がかりが語ることをまとめると、



図6 大戸 内側から見たところ。板戸を開けている

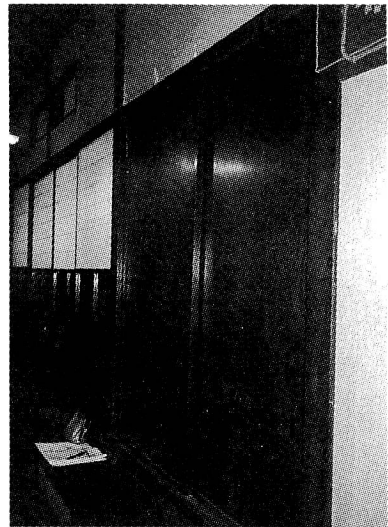


図7 ツギノマから通り土間にでる板戸

1. 明治40年10～11月頃、A・K氏は豊照町から東厩島に転居した。
2. 大正2年の新聞紙を中に塗り込めた（この年から程ないころに塗られたと思われる）上層の壁にはA・K氏が関与していたと思われる。
3. 下層の壁に塗り込められた反古紙の字は明治中期以後のものと思われる。
4. 建物は以前の建物が火事で焼けたあと、その部材を一部使用して新築したと思われる。
5. 東厩島町は明治23年4月の住吉町大火で全焼したと思われ、町屋の建設はそれ以後と考えられる。
6. 明治23年以後、A・K氏が転居してくる明治40年まで、東厩島が焼けた大火はない（小規模の火災は不明）。

以上から言える確実なことは、明治23年の大火から、壁の塗り直された大正2～3年頃の間、町屋が建てられたということです。さらに3～6から推定されるのは、明治23年の大火後まもなく町屋が建設されたのではないかとということで、とすると明治40年のA・K氏の東厩島町への住所変更は新築しての入居でなく、築後15年以上の家への転居と考えられることとなります。その約6年後の大正2～3年の内壁の塗り直しも、築20年ほどの家の

改装ということになり、新築と改装の間隔としては自然に思われます。

* 新聞によれば出火原因は煙草の吸い殻の不始末でした。網干嘉一郎「新潟の"住吉神社"について」（『郷土新潟』第8号、1966年）には、花沢方に泊まった旅役者に恨みを抱いた女の放火と書かれていますが、根拠は不明です。なお新聞にも花沢家は「指物職兼旅人宿営業」とあります。南・北毘沙門町はそれまで貸座敷、娼妓の営業許可区域になっていましたが、この火事以後許可区域から除外されました（『新潟市史 通史編3 近代（上）』、1966年、131p）。

町屋の生活と杉の文化

私がお訪ねしたとき、Oさんはお一人暮らしでした。お話では、10人以上の人の暮らしていた時期もあったとのこと。最後に私の体験した町屋の内部空間と、聞かせていただいた往時の生活の様子の一部を記しておきたいと思います。

通り土間の入口には大戸がありました（図6）。私のお訪ねした頃は外側に玄間室が増築され、サッシの引き戸がはめられていましたが、外出されている時には、時折中の大戸が閉じられていることがありました（外出時と夜間には閉じるのが原則だった

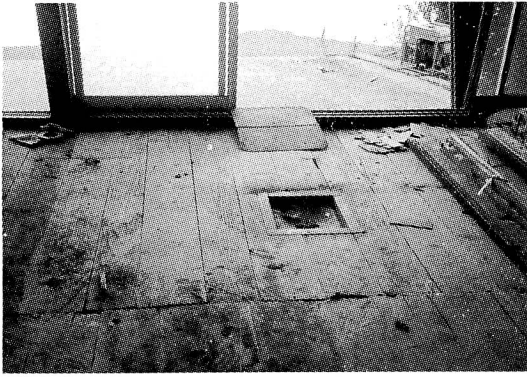


図8 ツギノマの床下から出てきた炉

とのこと)。大戸には仕掛けがあり、くぐり戸を通して外に出てから、その仕掛けを用いてくぐり戸を10センチほどしか開かないようにすることができました。帰宅した時はその隙間から手を入れて仕掛けを操作して、戸を開けることができます。

大戸の框をこえて中に足を踏み入れると、土間(昔ながらの土を固めた土間でした)に最初に接しているのがツギノマです。この部屋の土間側は1間が壁、1間が板戸で、直接外からは見えません。板戸を開けると、正面奥にブツマの仏壇が見えます。板戸は平常は使わず、葬儀時の出棺の時にだけ開けられる死者の出口でした(図7)。

ツギノマとブツマの前には庇がかけられ、以前は板塀に囲われた庭に面して縁側があり、端(入口に近い方)に便所がありました。庭には桜、夾竹桃、さざんか、松が植えられ庭石が配されていました。

チャノマは土間側2間が一部ガラスの入った障子戸で、来客はここで迎えられます。この部屋に接するところから、土間の外壁にすりガラスの入った窓と高窓がはめられ、隣家が建っていた頃も、この高窓から差しこむ光で思いのほか明るくなっていました(ツギノマに接する土間部分に窓はなく、暗い場所を通り抜けるので、高窓からの光が不思議に明るく感じられました)。この土間側の障子や欄間と、坪庭から差し込む光で、室内はやわらかく照らされていました。ここには炉が切っており、冬は来客のある日中は来客用の框をはめ、夜になると炬燵用の框に変えて炬燵檜を立てたそうです(解体作業で各室の畳や床をはがしたとき、奥のロクジョウを除く6室に炉の跡が見つかり、ほとんどの部屋にかつて

囲炉裏があったことが分かりました(図8)。最後まで使われていたのが、チャノマの炉だったわけです)。

Oさんが昭和28(1953)年にお嫁に来たとき、この家にはOさん夫婦と両親、弟2人と妹の7人が暮らしていました。両親はツギノマに、夫妻は昭和10年代に増築された2階奥の6畳に寝起きしました。妹と下の弟がイマに、上の弟がロクジョウにいて、部屋はそれぞれの住人の名をつけて~の部屋と呼ばれていました。夜、老夫婦がツギノマに引込むとほかの家族がチャノマに来て、冬は炬燵にあたりたりして、団欒の一時を過ごしたそうです。そんな折りに来客があると、一同は隣のトオリノマに移り、チャノマはまた客室に早変わりしたとのこと。

妹と弟が家を出ると、下の弟がロクジョウに移りましたが、やがて出ていきました。夫妻に子が生まれるとイマが子供部屋になりましたが、大きくなると、物置だった2階の手前の2室が子供部屋に改装され、夫妻は下のイマに移りました。最後にOさんがお一人暮らしをされていたときには、イマが居室になっていました。

婚礼の祝言も、葬儀も自宅で行われました。大勢の人が集まる時はブツマ、ツギノマ、チャノマの間の敷居をはずして畳を詰め、3室を一体化して、鍵の手になった22畳の座敷にしつらえました。婚礼の式の時は板前さんが流して調理をしてくれたそうです。

父や母の亡くなった時も3室は一体化され、ブツマの床に幕がはられて祭壇が作られました。板戸が開けられて焼香場が設けられ、前述のようにここから棺が運び出されました。

夏には部屋の間仕切りの障子や襖がすべて簾戸に変えられ、家を風が通り抜けて涼しかったそうです。平面図で分かるように押入のあるのはイマとロクジョウだけでした。ツギノマでは上げられた布団は部屋の隅に置かれ、屏風で目隠しされました。屏風は実際に風よけにも使われ、また儀礼などで襖を壁に変えたいときには平らに広げた屏風を、長押の上から竹のとめ具でとめました。

新潟の古い町屋には土間部分に天井をはずさず、小

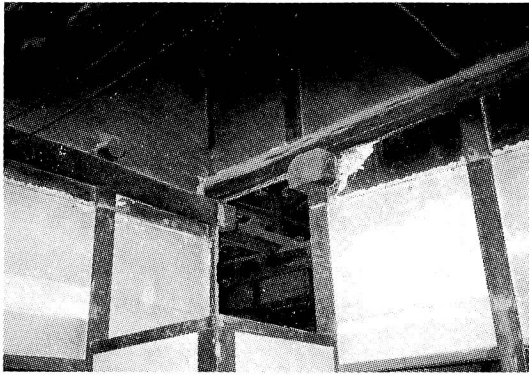


図9 ダイドコの天井を撤去したところ 土壁が黒くなっていて、かつて吹き抜けになっていたことがわかる

屋組を見せている家が多いのですが（私の見た限りでも、大西家、アイト商会、高杉家など）、〇家でははられています。ただ、ダイドコとダイドコに接する土間の上だけは当初天井がはられず、吹き抜けになっていたことが解体の結果分かりました（図9）。この部分の小屋組は土壁で囲われて、煙などが屋根裏のほかの場所に逃げていかないようになっていました（この梁と土壁は真っ黒になっていました）。仕切壁がもとはなく、イタバと一体になっていたダイドコには、大きな石の囲炉裏が切られ（解体作業中に床下に放置されたその石炉が出てきました）床下が炭や野菜の収納になっていました。土間の奥の突き当たりには以前はかまどがあったとことです。裏庭の奥には以前2階建ての物置小屋があり、母屋との間に屋根が差し掛けられていました。家の中にあつたかまどは、後にこの屋根の下に移されました。

このように、東厩島町の町屋は時代によって増築や改装を加えながら、それぞれの時代に応じた使い方をされてきたようです。昭和39（1964）年6月の新潟地震の時には、土台の上全体が数十センチ後方へずれたとのことですが、全体に大きく傷むことはありませんでした。お話ではとにかく「人だけはたくさん来た家だった」とのこと。住んでおられた方々の雰囲気もあつたに違いありませんが、町屋の入りやすさと出やすさ、開放性がやはり作用していたのかも知れないと思います。

最後に建物の材料ですが、棟札を探しに屋根裏に入ったとき、農家のような松などの曲がった梁が見られるのでは、と何となく想像していたのですが、目の前にあつたのは、意外にも細身のまっすぐな杉の丸太梁でした。東厩島町の町屋は柱と梁などの主要部材がすべて杉です。その後見た、やはり明治に建てられた町屋（高杉邸など）も、同じ杉の家でした。よく言われる「新潟には杉と男の子は育たない」という言葉は、新潟が「女町」であることを評したものと解釈されることが多いようです。しかしある時期まで、新潟の家はすべて杉で建てる習慣（あるいは伝統）があつたのではないかと考えてみれば、それだけ必要な杉を、町中では育てられない（自給できない）ことを嘆いた言葉とも読むことができるのではないのでしょうか。

新潟の町屋は杉の建築文化であつたのではないかと、との推測は、今後さらに検証していく必要がありそうです。 （おおくらひろし・美術評論家）



トピックス



番付

東厩島町の町屋の番付は、解体した大工さんの話では、軸組が正面左（北東）隅を起点に桁行き（南北）方向が3尺間隔で〈一〉～〈二十一〉（漢数字）、梁行き（東西）方向が3尺間隔で〈い〉～〈る〉（いろは）で番付がつけられていました（下図参照）。しかし小屋組は桁行き（南北）方向が〈一〉～〈一八〉（漢数字）、梁行き（東西）〈一〉～〈九〉（漢数字）と束の位置（実体）でつけていくという番付で、軸部と小屋組で違う方法の番付が採用されていました（図）。今ではほとんどこうしたことはない、大工さんも意外そうな顔をしておられました。

古民家に詳しい宮澤智士氏（長岡造形大学教授）

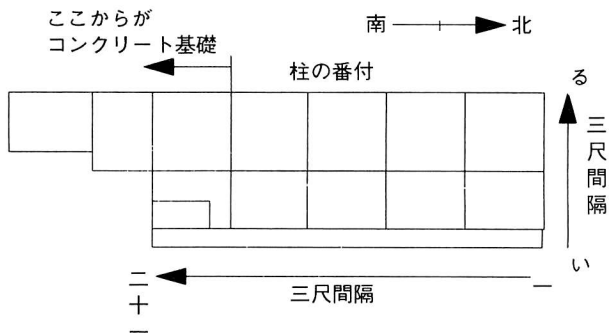
におうかがいしたところ、古い民家では、こういう付け方はよくあるとのこと。茅葺き民家では、軸部と屋根の作り手が違うことが多く（屋根は村人の共同作業で葺くことが多かった）、また柱は大黒柱や差し鴨居などで補強してとばされる（省略される）ことがあるため座標軸を設定しての番付が比較的早く採用された（座標軸を用いての番付は歴史的に新しい）が、小屋束が省略されることは基本的にないため、小屋組の方では柱の実体でつけていく方法が遅くまで残ったとのことでした。

東厩島町の町屋の番付は、こうした古い民家の形を残したもののようです。（大倉）



上 古い番付（墨書）と新しい番付の板

右 小屋束の番付



東厩島町の町屋実測調査について

岡崎篤行・黒野弘靖・水嶋貴之

調査の概要

1) 調査日程

主に平成13(2001)年12月20日、27日の2日間に実測、ヒアリング等を行い、随時補足調査を行った。

2) 調査体制

調査の参加者は以下の通りである。なお、調査図面のとりまとめ、清書などは水嶋貴之が行った。

新潟大学

岡崎篤行(工学部建設学科都市計画研究室助教授)
・黒野弘靖(同意匠・計画研究室助教授)・澤村明(経済学部経済学科助教授)・寺尾仁(工学部建設学科助教授)・多田克彦(工学部技官)・小林治郎(都市計画研究室修士2年)・岡田岳人(都市計画研究室4年)・小柳健(同上)・貝瀬秀人(同上)・坂田杏見(同上)・佐藤憲明(同上)・豊田伸哉(同上)・水嶋貴之(同上)・藪田充彦(同上)・渡辺豊(同上)・渡辺寿紀(意匠・計画研究室4年)

青稜短期大学

藤井由香(講師)

新潟下町の歴史的景観を愛する会

大倉宏(美術評論家)

3) 調査内容

平面図、配置図、断面図、各室展開図の実測調査、写真撮影、ならびに家業の変遷、各部屋の使われ方の変遷などに関するヒアリング調査を行った。

東厩島町の町屋の建築概要

構造：木造平屋建て(増改築により一部2階建て)、

切妻・妻入り、瓦葺き

規模：間口5間、奥行14.5間

建築年代：明治後期(推定)

外観の特徴：平屋建て、切妻・妻入りで前面に下屋を持ち、妻面の壁は押縁下見板張りとなっている(立面図参照)。そのファサードは、現在の新潟では見かけない意匠であり、むしろ塩谷、桃崎浜、岩船などによく見られる町家のファサードを彷彿とさせる。通りに面して前庭があるのも、この家の特徴である。

間取りの特徴：屋根は、土間と床上を一体に切妻の大屋根を架けているにもかかわらず、間取りは、チャノマとツボニワの位置で二つに分けている。すなわち、ツボニワの道路側を接客用の続き間座敷、奥側を家族用の寝室や台所としている。また、土間から床へは、ツボニワを正面に見たチャノマから上がる。そしてチャノマには天井がある。こうした特徴は京都の町家と共通する。北陸地方の町家一般がツボニワを持たず、チャノマを吹き抜けとして天窓から採光することとは、大きく異なる。

各部屋の説明

ブツマ

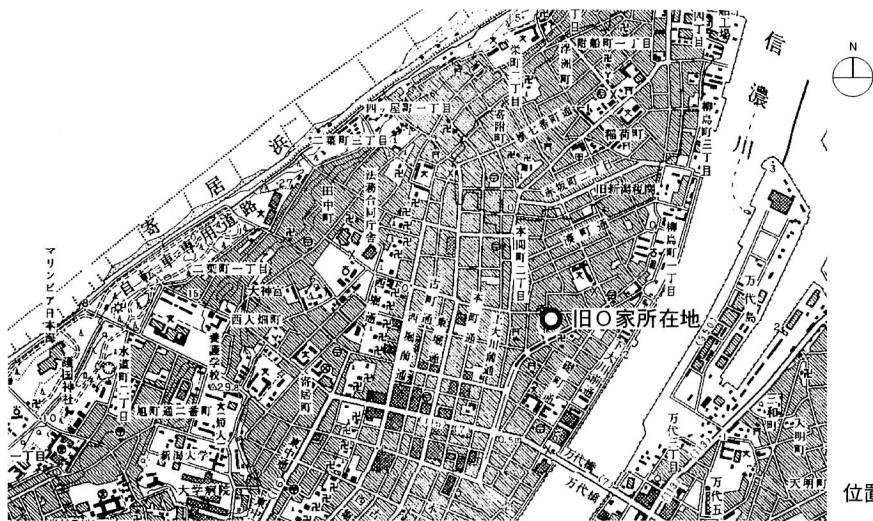
トオリドマから見て突き当たりの向かって右側(北側)に床の間、左側(南側)に仏壇がある。

ツギノマ

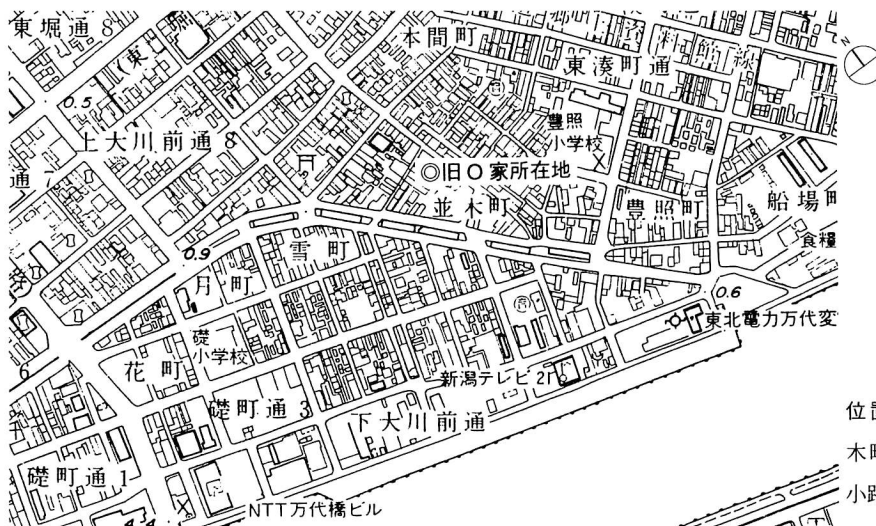
お年寄りの部屋。玄関脇に便所、縁側があり、お客さんもここを使用していた。

チャノマ

家族集合の部屋。お客さんがくると家族はトオリノマに移動する。冬の夜、囲炉裏はコタツに変わ



位置図 1



位置図 2 旧O家は並木町の通りに直交する小路に面している

る。

イマ

主のいる部屋。女中さんの部屋、受験期の勉強部屋に使われた。

ロクジョウ

勉強部屋として使用するため、畳の部屋を板に変えた。

イタマ

もとは畳が敷いてあった。窓がなく明かりが漏れないため、戦時中の灯火規制時には、ここで食事をとっていた。

トオロドマ

冬は三輪車に乗ったり、まり投げをしったり外部空間として使用していた。

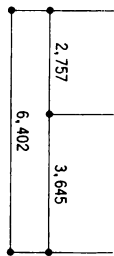
イタバ・ダイドコ

昭和 30(1955)年ごろまではドマで座る流しだった。現ダイドコで藁を敷いて食事をしていた。昭和 57年に現ダイドコに移動した。それまでのダイドコは石でできた囲炉裏のほか何もない部屋だった。穴倉があって炭、野菜等を保存していた。

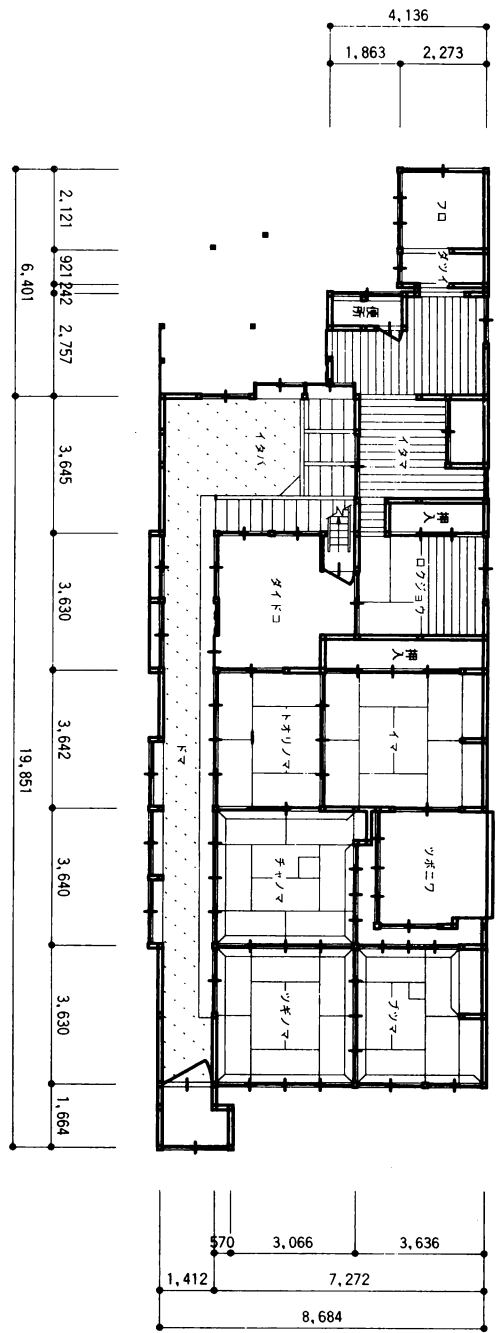
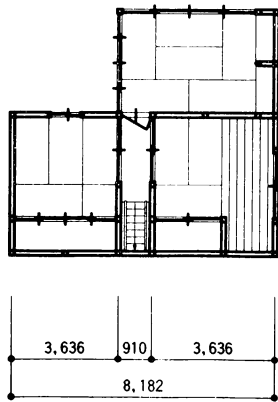
2階 階段両脇および奥の部屋

昭和 15、6(1940、41)年ごろに2階を増築し、同時に屋根裏を改造して階段両脇に2部屋を設けた。

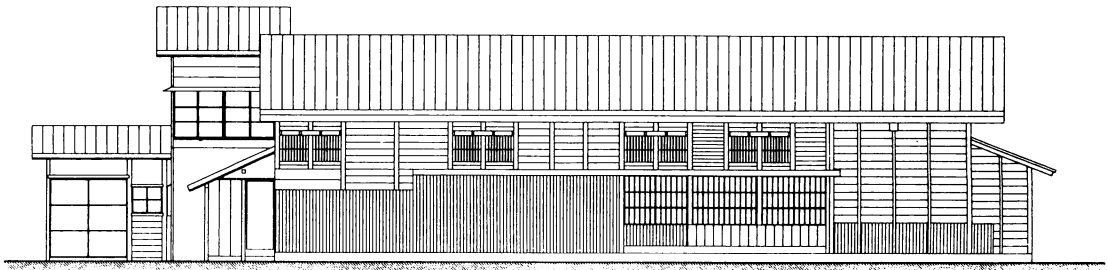
(おかざきあつゆき・新潟大学工学部助教授、くろのひろやす・同工学部助教授、みずしまたかゆき・藤田社寺建設株式会社)



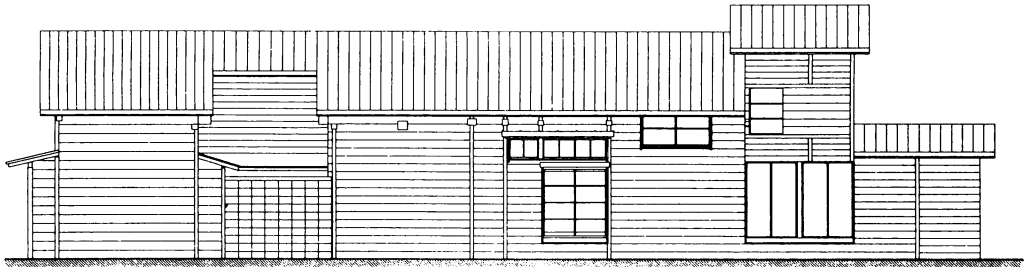
2階平面図



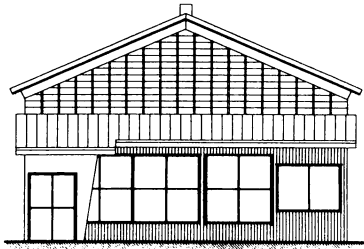
1階平面図



西側立面図



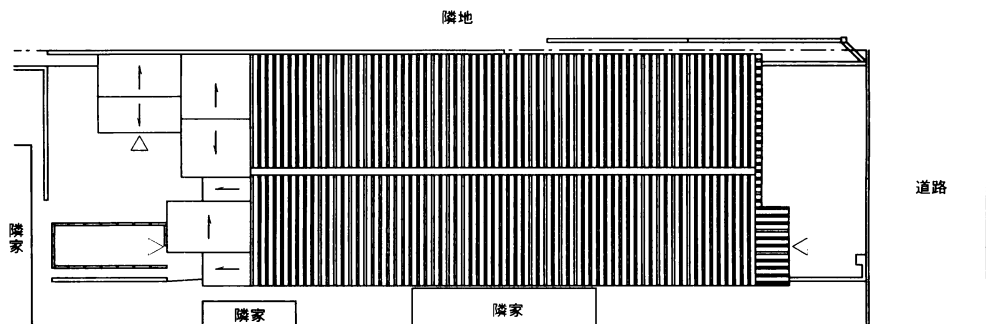
東側立面図



北側立面図



南側立面図



配置図 瓦を表現してある部分が、今回部材を解体・保存した部分



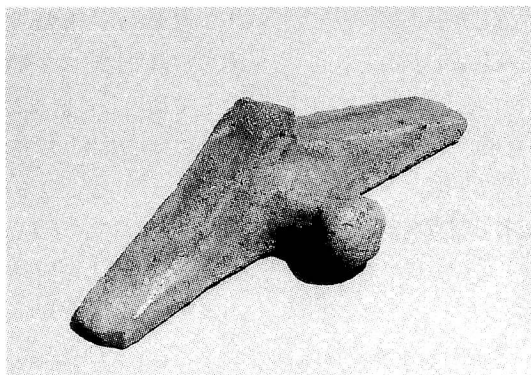
面戸瓦（めんどがわら）

東厩島町の町屋の瓦の取り外し作業の時、軒瓦の下から写真のような、素焼きの文鎮のようなものが出てきました。軒瓦は「鎌軒瓦」といわれるタイプです。軒先に垂れ下がる「垂れ」の下端ラインが瓦上面の湾曲に平行している上、隣接する瓦の正面の接合部（合端）をおおう「万十巴（まんじゅうどもえ）」がないため、接合部に三角形の隙間が生じます。その隙間を埋めるような形で、軒瓦の先端下部に置かれていました。

こうした隙間を面戸といい、板や漆喰でふさがれ

ることがあると建築辞典にはでていますが、こうした素焼き陶器によるものは、棟積みの下端の隙間（これも面戸という）をふさぐものはよくあるものの、軒先部では珍しいとのこと。新潟は風が強く、その風で雨やみぞれ、雪なども吹き込むため。水に弱い板や漆喰でなく、陶器のものが使われたのでしょうか。

丸い取っ手様の突起がついた形は、どこか愛らしくもあり、大工さんや建築関係の人々もこんなものを見るのは初めてとのことでした。（大倉）



面戸瓦



前庇の瓦部分 面戸瓦がみえる



面戸瓦のおさまり方

東厩島町の町屋の移築支援活動のこれまで

大倉 宏

町屋が壊される

東厩島町の町屋が、やがて取り壊されなければならないことは、1997年に最初にお訪ねしたとき、Oさんからお聞きしていました。国が進める道路拡張計画の法線にかかっていたからです。

新潟の古い町屋に興味ある方々を、その後何度もこの町屋にご案内しましたが、ほとんどの方が、この町屋が壊されることを残念がってくださいました。

数人の仲間たちと1999年に作った「新潟下町の歴史的景観を愛する会」で開催したシンポジウムでも、町屋について語り合ったりしました*。

比較的大きな話題となったのは、Oさんが用地買収に正式に応じられ、取り壊しが目前に迫った2001年秋のことです。私たちの下町ウォーキングに参加して町屋を見学した新潟日報写真部の米倉正雄さんが、新聞の一面をつかって中の様子をカラー写真で紹介し、記事を書いてくださったのです**（図1）（新潟日報はその後も「住吉町・並木町物語」という題で、道路拡張で失われる町並みを惜しむ連載記事を掲載してくれました）。

記事に反応して下さったのが、新潟大学の若い先生方でした。経済学部助教授でまちづくりが専門の澤村明さん、工学部助教授で都市計画が専門の岡崎篤行さんのお二人が、特に関心を寄せて下さり、お二人の働きかけで、新潟大学の学生たちによるO家と浜田家（O家の通りを挟んで向かいの昭和初期の町屋。やはり道路拡張で取り壊されることになっていました）の実測調査（2001年12月20日、27日）が行われました。

年10月9日、新潟市北部総合コミュニティセンター、「シンポジウム『原点』から考える新潟」
2000年5月13日、新潟市中央公民館（図2A、B）
**「消える「しも」の面影 町屋 再開発の波に」新潟日報、2001年11月26日

専門学校による移築計画

もう一人、記事を読んで関心を持って下さったのが、新潟市内の専門学校キャリアテクニカ環境情報専門学校の理事長五十嵐忠司さんと学校長の五十嵐実さんでした。同校では、これまでも亀田町の水倉や巻町の庄屋の座敷を移築して、教育施設として活用していました。話題となったO家も新たな移築対象として考えて下さるという意向を示して下さったのが、Oさんが新しいお住いに移られた2002年1月です。私が仲介させていただいて、移築を検討するとの前提で、町屋の解体（あるいは取り壊し）を同校が行い、部材等も同校で引き取るということで、Oさんにご同意をいただきました。

しかし、その後解体、移築の経費の問題で移築を断念するかも知れないとの意向が、学校から私に伝えられてきました。そこで、経費の問題が障害ならば市民から募金をつのり、移築計画を支援しようと活動を始めることになりました*。

*この間、3月9日、10日両日に舞踏公演「堀川久子独舞 感覚考Ⅱ 「路地」下町にて（5）」が、空き家となった町屋を会場に開催され（10日は町屋の一般公開も実施）、のべ300人もの観客が訪れる出来事がありました。

*「シンポジウム 町は、昔と今の語らう場所」1999



図1 町屋を紹介した新聞記事

移築支援の募金活動始まる、が目標に達せず

活動を単発で終わらせず、今後にもつなげていきたいとの思いもあり、これまで新潟の町屋や歴史的建造物に関心を寄せて下さったり、シンポジウムに参加していただいた方々に呼びかけ、発起人として加わっていただくようお願いしました*。初の発起人会を2002年4月4日に開催し、募金活動の具体的な方法を話し合いました。6月末まで500万円を目指すという1次目標をたて、実際に印刷物を郵送、配布などして活動を開始したのが、5月はじめでした(作業には、多くの学生さんたちも手伝って下さいました)(図2C)。活動にかかる実費は、発起人からの支援金を充てることにしました。

新聞、テレビ、ラジオなどから取材がいくつもあったこともあり、5月末で早くも120万円ほどの募金が集まりました。が、目標にはまだ遠い、ということで、実際に町屋の内部を公開し一般市民に見学してもらおう催し「町屋へあがってみなせや」を、6月後半2週間の週末4日間(22、23、29、30日)に行い、29日は町屋を会場に、発起人による「新潟下町再発見シンポジウム」を開催しました(図2D)。公開期間中に1094人の来訪者があり、会場で実施したアンケートにも町屋の保存を望む声が多く書かれていました。発起人の拠出金と会場での募金も含め、7月初旬に募金額は2,003,629円に達しました(但し活動経費を引いた残額が1,801,953円)。1次目標は残念ながら達成できなかったの

ですが、この成果をもとに五十嵐理事長と話し合いました。会として、今後も募金活動を続けるので、移築を実現していただけるかは今後さらに検討していただくこととし、できれば再築可能な形での手作業での解体と、解体部材の当面の保管を学校側をお願いしたいと要請して、これを了承していただきました。

解体は募金活動を始めた後に、抱えの大工に古い家の解体にボランティアで参加させたいとの申し出をいただいていた柰 Work's さんに、事情を了解していただいた上で、見積もりを依頼し、その後お願いすることになりました。結果から言うと、解体は廃材処理まできっちりおこなって400万円近くの経費を要する工事となりました。最終的には小川さんから単純取り壊しの場合の経費負担をいただき、残額を募金から拠出して全額を捻出することができたのですが、当初はまだ行き先の不透明な状況のなかで、工事をお引き受けいただき、丁寧な仕事を下さった柰 Work's さんには、振り返ってしま頭の下がる思いでいっぱいです。

* 発起人に名を連ねて下さったのは下記の方々です。
伊藤純一(建築家)・伊藤信行(家具作家/新潟下町の歴史的景観を愛する会)・上田浩子(デザイナー/新潟下町の歴史的景観を愛する会)・大熊孝(新潟大学工学部教授)・大倉宏(美術評論家/新潟下町の歴史的景観を愛する会)・岡崎篤行(新潟大学

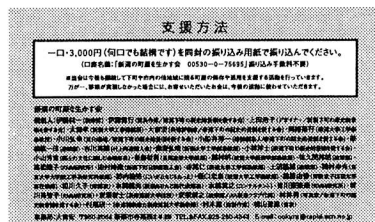


図2 町屋をめぐる活動のパンフレット

- A シンポジウム「町は、昔と今の語らう場所」(1999年10月9日)
- B シンポジウム『「原点」から考える新潟』(2000年5月13日)
- C 「新潟町屋 移築支援のお願い」支援を呼びかけるパンフレット(2002年5月)
- D 町屋の公開「町屋にあがってみませや」(シンポジウム開催2002年6月29日)
- E シンポジウム「新潟の町屋を見直そう」(2002年8月24日)





図3 壁土をおとしたところ



図4 通り土間の小屋組

工学部助教授)・小川弘幸(文化現場/新潟下町の歴史的景観を愛する会)・小船井秀一(雑誌編集人/新潟下町の歴史的景観を愛する会)・兼松紘一郎(建築家)・吉川真嗣(村上町屋商会)・黒野弘靖(新潟大学工学部助教授)・小林洋士(新潟下町の歴史的景観を愛する会)・小山芳寛(郷土の文化に親しむ会理事長)・後藤哲男(長岡造形大学教授)・澤村明(新潟大学経済学部助教授)・佐久間邦昭(建築家)・高橋照子(KMM 研究所)・田村時蔵(新潟下町日和編集人会)・寺尾仁(新潟大学工学部助教授)・土沼隆雄(要松園コーポレーション代表)・西村幸夫(東京大学大学院工学系研究科教授)・野内隆裕(にいがたなじらねっと)・樋口忠彦(新潟大学工学部教授)・藤居由香(清陵女子短期大学専任講師)・堀川久子(舞踏家)・本間龍夫(新潟あきんど塾代表理事)・水嶋貴之(新潟大学建設学科学生)・皆川袈裟雄(KMM 研究所)・皆川美智子(KMM 研究所)・宮澤智士(長岡造形大学教授)・武蔵靖之(建築家/JIA 新潟)・村井勇(写真家/新潟下町の歴史的景観を愛する会)・村尾欣一(新潟職業能力開発短期大学助教授)・村木薫(造形作家)・横山蒼鳳(書家)

解体工事始まる

解体工事は、できる限りきちんとした記録を残そうと、発起人会で話し合ったのですが、頼りの新潟大学の先生方と学生たちが、ナショナルトラストに

よる村上の町屋の調査にかかりきりになる時期に重なってしまい、結局私が可能な限り現場に足を運び、写真記録を撮り、墨書などが出てこないか注意するということになりました(発起人の方々もそれぞれ、何度か足を運んで下さり、現場を見て下さいました)。

と言っても私自身、かなり多忙だった時期で、重要な時に現場に行けない日もかなりあり、十分な記録ができたとは言えません。それでも手元のメモでたどってみると、8月2日の現場の片づけから作業が始まっています。6日、仮設トイレ設置、隣地フェンス取り壊し。7日畳、建具に番付入れ、足場資材搬入。8日前面庇の鉄骨解体。畳をはがし、建具、上がり框、敷居まわり等取り外し。9日イマより土壁をくずし始める。と作業が進んで、お盆休みをはさんで17日に天井はずし(解体部材はキャリアテクニカ環境情報学校敷地の屋外保管されることになったので、屋外保管でくいの出やすい建具類は、発起人の一人で家具作家の伊藤信行さんの仕事場に預かっていただくことになり、16日に発起人とボランティアで運搬しました)。19日、解体足場組み立て。20日には瓦降ろしが始まります(瓦の手作業での取り外しと保管も検討しましたが、経費の問題と、瓦の状態から再利用が難しいと分かったため、一部をサンプルとして残すこととし、この日新潟大学の先生方と学生たちによる前面庇部分の瓦の取り



図5 野地板が撤去され光が射し込む

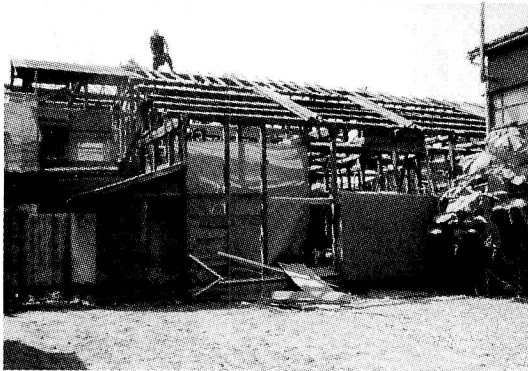


図6 垂木の撤去



図7 番付を付してはざされた軸部

外しも行いました)。26日には瓦のなくなった屋根から野地板も取り去られました。屋根から100年近く陰のなかにあった空間に、明るい夏の光がさんと差しこみ、梁や柱を照らし出した時の美しさに、息を呑みました。翌27日には小屋組（棟木、母屋、束）が、新たに番付を記した板を打ち付けられながら、とりはずされました。28日から軸組の解体開始。結局解体作業は8月中に終わらず、0さんから再度延期のお願いをさせていただいて、土台まですっかり撤去されたのが、9月中旬に入ってからでした。その間にあった、いろいろな発見は別に記したとおりです。私自身にとっても家の解体作業をつぶさに見るのは初めての体験で、たいへん印象的な1ヶ月半でした（図3～7）。

解体作業中の8月24日、「新潟下町の歴史的景観を愛する会」主催で、新潟市中央公民館を会場に「新潟の町屋を見直そう」というシンポジウムを開催しました（「新潟下町の歴史的景観を愛する会」のメンバーは全員「新潟の町屋を生かす会」の発起

人になっているので、実質は「町屋を生かす会」の活動の一貫として、東厩島町の町屋への関心を高める意図をもって、開催したものです）（図2E）。基調講演に京都大学の高田光雄さんをお招きし、シンポジウムの前に解体中の町屋も見させていただきました。パネルディスカッションには新潟日報論説委員の篠田昭さんにもパネリストとして参加していただいたのですが、篠田さんはそれからまもなく新潟市長選挙への出馬を表明され、11月10日の選挙で当選し新しい市長になりました（その時は予測もできないことでした）。

解体後の経過

解体は無事終了し、明治期に建てられた建物であったこともほぼ確実に判明しましたが、肝心の再建計画は、支援募金が目標額に達しなかったこともあり、終了後の会と学校との話し合いでも、実現の見通しを示していただけませんでした。加えて当初計画された学校施設への転用も、活用方法などで検

討すべき点が多々あるとの考えが示されました。

また、移築支援募金活動などを通じて多くの市民の関心が寄せられたことから（募金は積極的な再活動をしなかったにもかかわらず、その後も少しずつ寄せられ、最終的に458人、2,902,669円に達しました）、学校側から、より公的な形で移築再建が相応しいのではとの意向も示されたため、同校による移築支援を目的として活動してきた会として、逡巡を感じざるを得ない局面に立ち至りました。発起人会議で議論し、結論として、ひとまず募金活動は中断し、状況を率直に募金をしていただいた方々に報告して意見を寄せていただき、それをふまえて今後の活動を考えようということになり、やや時間は経過したのですが、12月末に支援者の方々の報

告書を郵送しました。寄せられた意見は数の多いものではありませんでしたが、概ね公的活用を探るべきとの内容で占められました。これを受けて、今後解体された町屋の公的移築・再現・活用を目指す方向での活動を展開しようということになりました。

行政機関等への早速の働きかけも検討されましたが、町屋そのものが、市や県のレベルで文化財として扱われることの、まだ少ない現状を鑑みて、解体された町屋についての解体経過をも含む報告書を作成し、またシンポジウムなどを改めて開催するなどして、町屋の価値、保存、活用の意義を広く訴えていくことから始めようということになりました。

以上が、町屋移築支援の活動、およびこの報告書が編まれることになった経緯です。



図8 2002年6月の町屋の公開とシンポジウム「町屋にあがってみなせや」を紹介する新聞記事（2002年6月19日付）



ありし日の町屋 ツギノマから
チャノマを見る。奥が通り土間
になっている (撮影 村井勇)

新潟市東厩島町の町屋 調査・解体報告

2003年6月28日発行

編集・発行 新潟の町屋を生かす会

代表 事務局 大倉宏

〒950-2064 新潟市寺尾西2-9-29

Tel・Fax 025-260-4342

<http://www.najiranet.com/ikasu.machiya.html>

レイアウト 千早和子

印刷 笹勇印刷株式会社

〒950-1217 白根市大字白根1358-1

Tel 025-373-2191

